

1929年アメリカ大恐慌とアーサー・ミラー — 2008年のアメリカ発金融危機との関連から —

及 川 正 博

はじめに

1. 2008年アメリカ発金融危機
2. 1929年10月24日のアメリカ大恐慌
3. アーサー・ミラーと大恐慌
4. 大恐慌を扱ったミラー作品
5. 大恐慌のテーマを扱う作品とそれらが書かれた時代背景
6. 大恐慌と「アメリカの夢」の崩壊
7. アメリカ社会へのミラーの警告と警鐘

おわりに

はじめに

本日のこの最終記念講義のタイトルですが、もちろん、昨今のアメリカにおける金融危機の状況が1929年10月に起こったアメリカ発の大恐慌とたいへん似ているので、時宜に適ったテーマであるとの思いもあって選びました。ご存知のように、今回のアメリカ発の金融危機の煽りをもろに喰らって世界中が経済不況に陥っております。29年の大恐慌の時には、アーサー・ミラーは14歳であり、父親の婦人服製造工場がこの大恐慌が直接の原因で倒産した状況を目の当たりにしました。このショッキングな体験を彼はミシガン大学在学中に懸賞応募作品として書いた『悪人ではない』（1936）という作品に描き込んだ程です。この作品は見事、賞を得て、その後これを2回書き直して応募を重ねました。これらはその主人公の名前を冠して『エイブ・サイモン家族劇三部作』として未出版ではありますが、ミラー研究家の間では知られています。それ以後、ミラーは大恐慌を直接・間接の別はありますが、諸作品で描くこととなります。

直接に描いた作品を年代別に並べると『二つの月曜日の思い出』(1955), 『代価』(1968), 『アメリカの時計』(1980)となります。大恐慌は、それまでの伝統的なアメリカのエトスである「アメリカの夢」“American Dream”に大きな揺さぶりをかけたという意味でも、大事件でした。この大恐慌と「アメリカの夢」崩壊をテーマとした作品に、ミラーの記念すべきブロードウェイ進出第一作目となった『幸運を独り占めにした男』(1944)という作品があり、これについてはお話しの後半で触れることになります。さて、この講義では、まず昨今のアメリカ発金融危機の背景、第2にそれと29年末のアメリカ大恐慌との関連性、第3にミラーの大恐慌体験、第4に大恐慌を扱った上記のミラーの作品がそれをどのように描いているか考察し、第5にそれらの作品が書かれたそれぞれの時代背景とミラーがこのテーマを扱った理由、第6に大恐慌と「アメリカの夢」崩壊との関係、そして最後に、大恐慌と「アメリカの夢」をテーマとする作品におけるミラーの警鐘ないしは警告のメッセージを読み解いてみたいと思います。

1. 2008年アメリカ発金融危機

サブプライム・ローン問題に始まり、リーマン・ブラザーズの破綻で爆発した昨年来の世界的な金融危機が解消することもなく、世界は2009年を迎えました。昨年9月のリーマン・ショックで最大の危機に陥ったウォール街を見れば明らかのように、市場原理一辺倒の資本主義は、もはや限界に達している感があります。旧来の秩序は崩れて市場はまさにカオスと化し、日本を含む世界のあらゆる枠組みが揺らいでいます。中曽根康弘元首相も「米国の経済政策での自由放任主義は人間性が伴っていない。言い換えれば、情のない資本主義というものだった。今回の危機でこの限界がわかった」(「大波乱に立ち向かう9」, 『讀賣新聞』, 2009年1月11日, 1ページ)と述べて、その非情さを指摘しています。当面はアメリカの経済立て直しが、バラク・オバマ、アメリカ新大統領にとっての最大の政治課題になります。

ところで、ニュー・ヨークのウォール街のど真ん中に大きな牛の銅像があるのを皆さんはご存知でしょうか。この牛はウォール街の繁栄を願う銅像で、英語圏では「株式市場の強気」を“bull”と言います。ちなみに「弱気」は“bear”だそうです。ふだんならば株で儲けた人が、この銅像にあやかってその肩や背中をなでるのですが、2008年の秋は違いました。“Arrest Bush,” “Greed Kills,” “Bailout=Bullshit”などと書いたプラカードを持った人たちが、この牛の足元に寝そべっている姿が見られたのです。彼等は別に株で大損した人たちではなく、ウォール街の金満会社を公的資金で救う位ならば、その前に自分達の暮らしを守ってくれと訴えて、政府の金融機関救済に反対する市民たちでした。アメリカ政府が金融支援法案で想定した拠出額は7000億ドルと言われています。これをアメリカの総人口の3億で割ると一人当たり2000ドル、日本円ですと約20万円にもなる。納税者一人当たりなら、5000ドル以上の負担となります。

多くの市民は、こうした莫大な公的資金を使った救済法に断固、プロテストしたのです。

今回の金融危機の直接の原因ですが、これは要するに、払えない借金の証文に、「今は無理だけど、将来は払えますよ」という錯覚を顧客に起こさせてサインさせるシステムでしょう。「将来は、今よりも金持ちになっている」と信じ込まされた、あるいは信じることができた人間は、いきおい自分の身の丈に合わない借金をする。そもそも、サブプライム・ローンというのは、低い社会的評価しか受けていない人たちを対象に「今のあなたへの外部評価は不当に低いけれども、本当のあなたはもっと高い評価を受けて然るべきで、将来は必ずそうなりますよ」という甘い囁きをもたらすシステムだったのです。これに日本でも問題になった土地神話が絡んだ。「今あなたが所有している土地の評価は不当に低いけれども、いずれ本来の評価になるはずですよ」と。こうして、アメリカの金融業界は、このサブプライム・ローンのシステムを構築するに当たって、外部評価が低く、自己評価が高い人間こそが「アメリカの夢」を体現できるという神話を吹き込んだと言っても過言ではないでしょう。

他人を蹴落として競争に勝って豊かになること、これが「アメリカンの夢」だと正当化する競争社会アメリカの伝統的な考え方をひとまず脇に置くとしても、今回の金融危機の最大の原因は反論を覚悟で言えば、長期にわたるブッシュ政権の規制緩和と自由放任政策にあるというのが、大方の見方です。2000年の大統領選挙で民主党候補のアル・ゴアに接戦の末、勝利を収めて大統領となったジョージ・W・ブッシュでしたが、2001年1月の就任直後から今ひとつ支持率が伸びず低迷していた時に、例の9.11同時多発テロが起きました。彼はすぐさま、姿の見えぬテロ集団に宣戦布告し、それ以来アメリカは戦闘状態にあるのは周知の事実です。ブッシュ大統領がイラクとアフガニスタンでの戦争にかまけている間に、経済は「金銭欲」“greed for money”に飢えた市場任せの状態が続き、まさに、「市場原理主義」の圧倒的支配の状態にあると言えるでしょう。

市場原理主義は政府が過度な民間介入をせず、個人の自由と責任に基づく競争と市場原理を重視する新自由主義と相性が良いこともあり、特に歴代の共和党政権はこの市場原理を重視して来ました。こうした経緯もあってか、政府がこれといった規制もしないので、その間隙を縫って市場が企業統治の概念を持ち出して抜け道だらけの規制を設けて、金儲けに走った。その結果、デリバティブと呼ばれる各種の金融派生商品の横行を許した。住宅バブルの元凶となったサブプライム・ローンの債権を組み込んだ証券も含め、こうした金融派生商品は、すべて短期決戦型だったので、値下がり前に売り逃げするのが勝ちだという発想がまかり通ったのです。これは買った株を長く保有して、企業の成長とその配当を楽しみにするというこれまでの長期型の投資とは全く逆の発想なのです。ブッシュが大統領として君臨してられるのは2008年末までなので、それまでになるべく早く売り逃げすれば利益を確保できると多くの投資家は考えた。だが、あいにく半年早く破綻が訪れた。それが今回の金融危機の正体というわけです。

2. 1929年10月24日のアメリカ大恐慌

昨今の状況についてアラン・グリーンスパン前連邦準備制度理事会議長は、「100年に一度起こるかどうかの深刻な金融危機」だと言いました。実際の話、今回の事態は1929年10月24日にニュー・ヨーク証券取引所で株価が大暴落したことを切っ掛けに生じた金融恐慌に対する金本位制であるが故のシステム的な不備と当時の各国の当事者の対応のまずさが原因で、その後33年頃まで続いた世界的経済大恐慌と同じ状況なのです。今回の事態が、「大恐慌以後の最大の危機」と呼ばれる所以です。それでは、29年以前の状況はどうだったのか。第一次世界大戦後、20年代のアメリカは、大戦への輸出によって発展した重工業への投資、帰還兵による大幅な消費の拡張、モータリゼーションによる自動車工業の躍進、ヨーロッパの疲弊に伴う対外競争力の相対的上昇と同地域への輸出の増加などによって当時の大統領フーバーが「永遠の繁栄」と呼んだ経済的好況を手に入れていたのです。

ところが、大恐慌数年前には、既にその予兆があった。アメリカの農村部では農業恐慌が起こっていたのです。過剰生産が農産物の価格を下落させ、アメリカ国内では生産の消費力が低下していた。それでも、20年代のアメリカは、大量生産・大量消費の時代で「永遠の繁栄」を謳歌する一般民衆には、農村部の景気停滞には無関心だったのです。そして、この20年代前半における余剰農作物は、ヨーロッパに輸出として振り向けたため問題は発生しなかった。しかし、農業の機械化による過剰生産とヨーロッパの復興、相次ぐ異常気象から農業恐慌が徐々に深刻になって行ったのです。具体的には、第一次世界大戦の荒廃から回復していない各国の購買力も追いつかず、社会主義化によるソ連の世界市場からの離脱などによって、次第にアメリカ国内の他の生産も過剰になって行った。また、農業不況に加えて鉄道や石炭産業部門も不振になっていた。それにも関わらず投機熱に煽られ、時の政府も適切な抑制措置を取らなかったのです。

こうして、アメリカの株式市場は、1924年中頃から投機を中心とした資金の流入によって長期上昇傾向に入って行った。ところが、20年代後半になるとヨーロッパの経済が上向き、また後進国における工業化の進展、ソ連経済の復興などにより、世界的な生産過剰状態が生まれ、アメリカでも見せかけの好景気が続き、国民の消費も伸びず、倉庫には売れない商品が溜まり始めていたのです。好景気によってだぶついた資金を株の儲け話を聞いた投機筋が市場に流入し、ますます投機熱が高まり、ダウ平均株価は5年間で5倍に高騰し、29年9月3日にはダウ平均株価381ドルという最高価格を記録したのです。市場はこの時から調整局面を迎え、続く1ヶ月間で17%下落し、次の1週間で下落分の半分強ほど持ち直したものの、その直後にまた上昇分が下落するという異常な動きを見せたのです。

このような状況下、29年10月24日午前10時25分、ゼネラルモーターズの株価が80%下落し、その直後の寄り付きは平穏だったのですが、まもなく売りが膨らみ株式市場は売り注文が押し寄せ、前例のない激しきで株価が大暴落したのです。11時には、全アメリカの株式売買の店から売り注文が続き、大パニックとなった。ウォール街周囲は不穏な空気に包まれ、警官隊が出動して警戒に当たらなければならなかったようです。午後3時に取引が終了し、その日の株式売買高は、売りを中心に1289万株という新記録だった。これが、全世界の殆どの資本主義国家を巻き込んだ世界恐慌の始まりです。投機業者で自殺した者は、この日だけでも11人に及んだと言われています。この日は木曜日だったため、後に「暗黒の木曜日」「Black Thursday」と呼ばれるようになりました。翌25日、ウォール街の大手株仲買人と銀行家たちが協議し、買い支えを行うことで合意しました。このニュースでその日の相場は平静を取り戻しましたが、効果は一時的だった。週末に全米の新聞が暴落を大々的に報じたこともあって、28日には921万2800株の出来高でダウ平均が一日で13%下がるという暴落が起こり、さらに10月29日には24日以上の大暴落が発生したのです。投資家はパニックに陥り、株の損失を埋めるため様々な地域・分野から資金を引き上げ始めた。この日は火曜日だったため、後に「悲劇の火曜日」「Tragedy Tuesday」と呼ばれるようになったのです。

こうして、29年のウォール街の暴落は米国経済に大きな打撃を与えた。しかし、当時は今日と違って株式市場の役割が小さかったために被害の多くはアメリカ国内に留まっており、当時の米国経済は循環的不況に耐えてきた実績もあった。不況が大恐慌に繋がったのは、その後、銀行倒産の連続による金融システムの停止に、アメリカ連邦準備制度理事会の金融政策の誤りが重なったためでした。フーバー共和党アメリカ大統領は事態に楽観的態度を取り続け、経済的基礎が健全で生産活動がしっかり行われているので大丈夫と断言した程です。彼は古典的経済学の信奉者であり、ブッシュ同様、国内経済において自由放任政策を取り続け、その一方で保護貿易政策を堅持し、世界各国の恐慌を悪化させて行ったのです。失業者は30年には400万人に達し、32年には実に1250万人を数えたと言われています。32年後半から33年春にかけてが、恐慌のピークだったようで、恐慌発生直前と比べて株価は80%以上下落し、工業生産は平均で1/3以上低落し、1300万人とも言われた失業者を生み出し、失業率は25%に達したと言われています。閉鎖された銀行は1万行に及び、33年2月にはとうとう全銀行が業務を停止、革命が起こるのではないかと懸念された程です。

こうした中、登場したのが民主党のフランクリン・D・ルーズベルト大統領でした。彼は従来の自由放任経済から、各産業や労使関係まで国家権力の干渉を加える統制経済と、大衆の購買力増進とによって景気の回復を図ろうとする修正資本主義に基づいたニュー・ディール政策を掲げて当選したのです。公約通り産業に統制を加え、価格・最低賃金・最高労働時間などを決めた全国産業復興法と、農産物の生産を制限して価格の安定を図ろうとした農業調整法、そ

れに雇用を増やし失業者の救済を図るためのテネシー川流域開発公社を設立しました。ただ、ニュー・ディール政策は1930年代後半の景気回復の前に規模が縮小されるなどしたため、30年代後半には再び危機的な状況となったので、同政策はどれほど効果があったかについては今日でも賛否両論があるようです。結局、アメリカの不況脱出と経済の本格的な回復は、その後の第二次世界大戦による莫大な戦争特需まで待つことになったのです。つまり、大恐慌が実際に終りを告げたのは、防衛支出と戦争が経済に活気を与えた1941年に入ってからでした。

3. アーサー・ミラーと大恐慌

ここから私が長年、研究の対象としてきたアメリカの劇作家、アーサー・ミラーとこの大恐慌との関連に関する話です。そもそも、作家というものは、小説家、詩人、劇作家いずれであれ、その創作活動を決定的に促した何らかの人生上の体験を持っているものですが、ミラーの場合、その創作活動の原点となった体験は、まさに29年末の大恐慌でありました。彼は1915年生まれですから、当時14歳だった。彼は後年、当時を振り返って「大恐慌は私の本であった」（『神々の影像』、『アーサー・ミラー演劇論集』、177ページ）と語っています。そして、次のように語っています。「1929年まで、私は事態はかなり堅固なものと思っていた。とくに、多くのアメリカ人の場合と同様に、誰か責任者がいるものと思っていた。正確にはわからないが、たぶん実業家だろう。・・・実際に、1929年まで言われ、なされてきたことは、ことごとくまやかしかであることがわかった。責任者などいなかったのだ。今にして思えば、その当時、私が得たものは目に見えない世界の感覚であった。ある実体が、その隠れた法則によってそのクライマックスを密かに用意していて、まさにその適切な時機に迷妄を破ったのだ。その意味で、1929年は我々のギリシャの年であった。神々が警告していたのだ」（『神々の影像』、176-77ページ）。

このように、大恐慌がミラーに決定的な思想上の影響を与えたことが分かります。事実、第一次大戦後の戦争景気に酔いしれていた人々は、この大恐慌によって様々な意味で大きな打撃を受けることになる。ミラーにとって、こうした状況は何か「目に見えない世界」によってもたらされたと思えたのです。29年はミラーが経験した「目に見えない世界の感覚」や「隠れた法則」の認識とは、永遠と思われた20年代の繁栄を支えた経済システムも29年10月24日のウォール街の株価大暴落に見られるように、一夜にして崩壊するというミラー自身の発見を意味しています。それは端的に言って、その後32年までに500を数える銀行を倒産させ、1300万ともいわれる人々を失業させ、背後にあってそれまでは、はっきりと目には見えなかったシステムの存在の認識に他ならないのです。青少年期を過ごした大恐慌の時代は、劇作家としてのミラーにとって「隠れた法則」発見の原体験となり、やがて大なり小なり彼の諸作品の背景やテー

マとなります。

さらに、この時代の状況に関して、ミラーは1987年に出版した自伝で当時の人々の貧しいがより良い明日の到来を信じて精一杯生きた彼等の気概を次の様に語っています。「人生は思い通りに行かないかも知れないが、面白く刺激的だ。人々は退屈しているようには見えない。これは、いつも何となく進歩がありそうだからだが、しかし何をするにも多くの努力が必要だからだ」（『時のうねり—ある人生—』、64ページ）。また、「ことは実に単純だった—私たちは希望が持ちたかった。希望とあれば、約束さえ示してくれば、幻想でもよかった。現実には耐えがたかった—失業者の恒常の大軍、停滞し挫折したアメリカ精神、人種差別の跳梁、すべての貴重なもの—特に若者の可能性の浪費。ルーズベルトは確かに天使の側にいたにせよ、決定的な崩壊の日を先送りするのがやっとだった」（71ページ）と述べています。このように「失業者の恒常の大軍」、「停滞し挫折したアメリカ精神」、「人種差別の跳梁」、「若者の可能性の浪費」が慢性化した時代を、希望を失わずに歯を食いしばって懸命に乗り切った当時の人々の体験を語っているのです。初期のいわゆる『エイブ・サイモン家族劇三部作』と『二つの月曜日の思い出』は、まさにここで述べられた大不況期における彼自身の実体験を直接に描いたものです。ここには、ミラーの大恐慌の体験を振り返るのではなく、そこへ常に立ち戻ってアメリカ社会が精神的危機に陥った時に、そこで学んだ経験を人々に知らしめる彼の使命感が見て取れます。

4. 大恐慌を扱ったミラー作品

大恐慌が、アメリカ人に与えた打撃は計り知れないものがあり、アルフレッド・ケイジンによれば、それは「人生の基調が、いや、人生を支えている意識そのものが、たちまちにしてあまりにも違ったものに見えたために、すべての伝統的な価値が突然根絶され、その多くが安っぽいものに思われたくらいだった」（『現代アメリカ文学史—現代アメリカ散文文学の一解釈』、423ページ）のです。ミラーは、それを「見えざる世界の世界」と呼んだのであり、その衝撃の凄まじさを語っていたのです。いずれにしても、30年代に入って資本主義の危機としての恐慌が、アメリカ社会に重苦しくのしかかってくると、資本主義機構そのものの中で抑圧された人間の無力感や経済的破綻から来る絶望感、虚無感が露になる。本来、極めて個人的、心理的な「疎外」という状況も、こうして社会構造的な色彩を帯びるのです。このような状況が『二つの月曜日の思い出』の背景であり、まさにこうした状況にある人間の典型的な例を、特にガスという人物に見ることができるでしょう。また、ミラーは『二つの月曜日の思い出』と大恐慌との関連性に関して、この作品は30年代を写すムード劇であり、「人間性」が忘れ去られることのないように「他人への同情」と「共通の運命を分かち合う意識」の必要性を説いたものだ

ったと述べています。また、この作品は「共同体」“community”の存在とそれを維持するために、いかに「連帯」“solidarity”が重要であるかを表明したものであると言うのです。

さらに、ミラーは後年に自伝で、そもそも、この題材を選んだのは、彼がこの作品を書いた当時の俄か景気に湧く空虚なアメリカとは異なる、確かな現実に触れる必要があったからだと言っています。その豊かさを謳歌する逃避主義の時代にあって誰も直視しようとしぬ主題、すなわち「大恐慌と生存のための闘い」(『時のうねり—ある人生—』, 353ページ)に取り組んだというわけです。実際、大不況とサバイバルの関係は、経済の崩壊は個人の尊厳の感覚と自信を失わせ、社会の理想と国家の神話は解体し、唯一の至上命令は「生き残ること」であったと言えます。厳しい大不況をサバイバルするための重要なファクターが他ならぬ連帯意識であり、これが後のミラー作品で繰り返し強調されて行くこととなります。

ミラーが『二つの月曜日の思い出』で意図したテーマは、まず、大恐慌の下、助け合い、連帯し合って30年代の経済不況期を生き抜く人々のサバイバルの問題とそこに垣間見える現代社会の人間疎外の問題であり、今一つは主人公パートのイニシエーションの問題だったのです。大恐慌のサバイバルを巡る「連帯」の問題は先に引用したミラーの説明で、すでに十分明らかになったので、「疎外」との関連性を述べてみます。前述したミラーの見解により、彼が産業主義と物質文明に挑戦する人々の精神の願望と諦念を、この自動車部品倉庫という仕事を舞台にして、描いたのは明白です。ところで、この自動車の部品というのは非常に象徴的な意味合いを持っていると言えるでしょう。大体、部品というものは、それ自体だけでは何の役にも立たず、また摩耗して駄目になれば新しいものと容易に交換されるのです。ここで描かれる登場人物は、そうした他との取り替えによって簡単に交換可能な部品の如き存在なのです。つまり、個性ある人間としての存在を奪われた、いわゆる「疎外」された人達の適切な比喩となっています。

言うまでもなく「疎外」に関する概念は、マルクスを初めとする色々な思想家によって定義がなされてきましたが、要するに「人間がのけものにされている」、「人間不在の」、「人間を無視した」、「非人間的な」というような広い意味として解釈できるでしょう。かつてヤスパーズは、1930年代までの社会において明らかになってきた様々な人間疎外の病理現象を分析して見せました。彼によれば、合理化と機械化を主軸とした科学技術の発達と集団の機構化に伴う人間の大衆化の結果、人間は機構の中で組織され、人間としての独自性を失い、単に数としてしか意味を持たない平々凡々たる存在、あるいは機構という機械の部品となってしまっているのです。「疎外」された人間を機械の部品と見るヤスパーズ概念は、この劇で描かれる労働者の的確な比喩であり、劇全体の底流として意識されていると言えます。以上、大恐慌と疎外の問題を関連させて述べてきましたが、次に『代価』で描かれた大恐慌時代に見られた価値観の対立に触れてみたいと思います。

ミラーは『代価』で、ヴィクター・ウォルター両兄弟それぞれの心理や道徳的価値観が社会のジレンマの真只中で対立・葛藤する様を描き、またそのような演出を望んでいます。大恐慌がもたらした愛も信頼も失った家族関係の中で、家を守ることにに関してその責任の所在を巡ってヴィクターとウォルターに、それぞれの価値観を対立させたかったからです。ミラーのこのような両兄弟に対する共感の平等思想の背後には、30年代の大不況社会の中で表面化した家および家族に対するアメリカ的価値観の対立があり、それをミラーは両兄弟の対立の中に象徴的に描き込んだのです。そして、ここには彼が両方の価値観に同等の価値の重みを持たせたいとする意図が透けて見えます。

さて、兄ウォルターに代表される家を省みない価値観は、繁栄の20年代から頭をもたげ始めた成功観と関係があります。いわゆる「成功の夢」であり物質的成功への崇拜思想です。大恐慌で顕在化した「成功の夢」の飽くなき渴望です。ウォルターはその支持者であり、他方、ヴィクターはその反対者です。こうして両者は、家族の価値観と成功の思想を巡って対立します。父親の破産で、それこそ捨てられた食べ物をあさって食いつないだという家族の信頼関係が、ヴィクターの自己正当化の支えになっているのです。ウォルターはそれを幻想だと決め付け、彼らの家庭には元々そんなものは存在しなかったと豪語します。子供達が世に出て成功することが、父親が望んでいた価値観であり、自分はそれに従っただけだ、とウォルターは言うのです。こうして見ると、父親の一見矛盾した言動が、両兄弟の人生に異なった選択を与えたと言えるかも知れません。

ヴィクターは、父親が自分に望んだのは、植民地時代や西部開拓時代のアメリカ人が築いた倫理的美德、すなわち寄る辺の無い厳しい環境の中で土地と家を守り抜こうとした自営農民的な家族意識の伝統であったと思うのです。他方、ウォルターは、家を捨て親をも否定しながら、むしろ父親からは尊敬された。それは、成功者がいかに尊ばれるかを如実に表しています。彼の成功の価値が大きいのは、不況と言うハンディをその出発点としたからです。19世紀後半の都市化と産業化の中で醸成された成功観は、ウォルターの生き方の中で、前者とは逆に自営農民的な家族意識を分裂させる個人主義の美德を生み出しました。伝統的な家の観念が崩壊しつつあった20世紀初頭の中で、とくに30年代は当時の若者に家に対して二者択一を迫ったことでしょう。こうして、ヴィクターは古い伝統的な従来の家意識に固執したのに対して、ウォルターは新しい歴史の流れに乗じて成功したのです。こうして見ると、二人の対立が極めて象徴的であることがわかります。ヴィクターは過去の世界の価値観に積極的にコミットし、この旧家と減じる運命にある人間像を象徴し、ウォルターは新しい時代感覚ですぐれて個人主義的な価値観に積極的にコミットした人間像を象徴するのです。これはちょうど、テネシー・ウィリアムズが『欲望という名の電車』で、新旧南部の価値観をスタンレーとブランチに象徴化したのを思い起こさせます。

翻って考えてみますと、両兄弟の担った価値観は、アメリカ社会が生み出した二つの矛盾した主流の生き方を代表していることがわかります。そして、それらがお互い排除し合うと同時に、惹かれあってもいるのです。ようやく今になって、警察官としてコミュニティーに奉仕するヴィクターの生き方に価値を見出し、他人との連帯の中に生きる喜びを見出したのは、他ならぬウォルターです。他方、ヴィクターも、ウォルターの合理的な現実認識、自己実現を尊重する考え方や成功観を欠いていたが故に、長年の忸怩たる悔恨の生活に甘んじざるを得なかった。ウォルターの時代の先端に行く思想には、ヴィクターも少なからず、羨望の念を抱いたことは否定できないでしょう。こうした両者の考え方は相対立するものの、両者とも社会が存続するには欠かせないものであって、かくしてヴィクターとウォルターの対立が象徴的である所以です。ヴィクターが体現する愛“love”と道義“loyalty”に基づく家族の連帯の原理とウォルターが代表する成功の原理は、こうして相反するものではありませんが、その対立は一般社会の厳しい現状であり、また社会が機能する上で、必要不可欠な要素でもあります。そして、両兄弟の対立の根が利他主義者と自己達成者の観念上の違いにあると見ることもできるのです。

ところで、ミラーはその伝記の中で、60年代の戦争態勢（ベトナム戦争）、黒人の目覚め（公民権運動）、時代の疎外感の中にあって、彼は来るべき幻滅の種を見たと述べています。そして、当時50歳にして彼は、過去の聖なる戦いの残響を遮断しようとしたのだけれども不可能だと悟り、この無力感を振り払うためのいわば悪魔払いとして『代価』を書いたと次のように語っています。『代価』はある点では、この繰り返しの無気力感を振り払う魔よけともいえる。二人の兄弟一ひとは巡査、もうひとは成功した外科医一が、長年の喧嘩別れのあと再会する。父親が死に、財産を処分することになったからである」（『時のうねり—ある人生—』、542ページ）。世の中を知り成人した両兄弟には「過去の裏切り」を水に流して新しい関係を打ち立てることが可能に思われたのだけれども、過去の思い出の品々（古家具）が、かえって以前の怒りや不満を掻き立てることとなり、再び喧嘩別れに終わるのです。しかし、世界は両者が代表する役割、すなわちヴィクターに代表される「秩序の忠実な守り手」とウォルターに代表される「野心的で利己的だが新しい治療法の発見者」をも必要としているのだ、というのがミラーの兄弟葛藤の説明です（前掲書、542ページ）。それを認識できず、相変わらず繰り返されるこの葛藤は、前述した当時のアメリカ社会に見られた新旧の異なる二つの価値観の対立を別の角度から説明したものと解釈できます。

最後の『アメリカの時計』のテーマは、前にも述べましたように大恐慌そのものであり、極限状況にある人間が、それをどのように乗り切ってサバイバルして行くかが問題の核心です。このテーマは、対照的に描かれる登場人物を通して、「アメリカの夢」の崩壊とそれを克服する手段としての「アメリカ的民主主義精神」の確認による未来への希望という形で発展します。具体的には、投機にうつつを抜かす財界人達の末路と忍耐強く現実を生き抜くリーの母親ロー

ズに描かれています。財界人の中には、事業に失敗して精神的に落ち込んで自殺するものが出ますが、これに対して、こうした時代の変化にするべく反応し、ただ金儲けだけではなく道義的な生き方を志向するクウィンやロバートソンのような財界人も平行して描かれています。機械的で非人間的な実業界・財界に抗して、個人としての人間性を擁護し闘いを挑むクウィンやロバートソンの姿に「個人の価値」対「法人型国家」の図式を見て取ることができるでしょう。このミラーお得意の倫理・道徳と正義に関する今ひとつの良い例は、農夫テイラーです。彼は競売の場面で仲間の助けを借りて自分の農場を取り戻しますが、居合わせた判事に泥棒呼ばわりされ後ろめたさと罪悪感を持ちます。しかし、法律を盾にとって正義を振りかざそうとする判事を登場させながらもテイラーをその対極に置いて、人としての本当の正義はどこにあるのだろうかと観客に問うミラーの姿がここには透けて見えます。この作品は、『二つの月曜日の思い出』のパート同様、リーのイニシエーションが描かれ、若者に大恐慌が与えたインパクトが劇化されているのです。

5. 大恐慌のテーマを扱う作品とそれらが書かれた時代背景

『二つの月曜日の思い出』が若かりしミラーの大恐慌時代の自らの体験を織り込み、その時代の人々が困難を乗り越えサバイバルするためには、いかに連帯意識、他者との共通感覚や人間的な繋がりが重要であることを示唆した作品であることを明らかにしましたが、これより先に未出版で処女作の『エイブ・サイモン家族劇三部作』で取り扱ったこの大恐慌というテーマは、ミラーにとって文字通り思索と創作の原点となり、以後、彼はこのテーマを直接・間接に取り上げて行くことになりました。ここで、大恐慌を扱った三つの作品とそれが書かれた年代を考察し、ミラーがなぜ大恐慌を扱った作品を書かねばならなかったのか、その必然性を見ておきます。55年の『二つの月曜日の思い出』に続いて68年の『代価』と80年の『アメリカの時計』にも、直接、大恐慌がメイン・テーマとして取り上げられています。この意味で、『二つの月曜日の思い出』は、大恐慌をテーマとする主要作品の先駆けとなったわけですが、大恐慌を扱ったこれらの作品が書かれた年、55年、68年、80年に注目すると、そこにある一つの共通項が見えて来ます。すなわち、個々の作品にそれらが書かれた時代の声が反映されているということです。それぞれの時代はアメリカがその内部に問題を抱えていた時期であり、ミラーは作品を通じてそれらを告発し、警告を發せざるを得なかった。そのたびに、彼はお互いの間に通い合う信頼の必要性和その回復を願いながら、アメリカに大きな教訓を与えてくれた大恐慌へと戻って行ったと言えるのです。

具体的に言いますと、55年は、第2次大戦後の経済繁栄の絶頂期で、そのためかえて人々の心の内奥が見えにくくなってしまったアイゼンハワー大統領の時代です。それは株価が上が

り、ドルが世界で唯一まっとうな通貨となった時代であり、金儲けに走るアメリカへの痛恨の思いが、ミラーに『二つの月曜日の思い出』を書かせたのです。ここには人間の連帯性が強調されており、彼はそのことを「このような劇は、私が感じたことなのですが、そこには表立ってはいないものの人間の連帯性が強調されていて、それは遥か過ぎ去りし時代の思い出だとしても、金儲け以外にも大事なことがあったと主張する一つの方法なのです」(『時のうねり—ある人生—』, 35ページ)と述懐しています。また、55年はミラーにとって個人的につらい時期でもありました。最初の妻との離婚調停は別にしても、マッカーシズムの煽りを喰らって非米活動委員会の聴聞に呼ばれ、 коммуニストの集会に同席した仲間の名前を明かすのを拒否して国会侮辱罪に問われました。こうした経験を基に個人と社会の関係性や自らの良心を基に社会を見つめ直そうとする意識が、ミラーの心に芽生え、それが『二つの月曜日の思い出』に大なり小なり反映されたのは確かだだと思います。

次に『代価』が書かれた68年は、ベトナム戦争がいつ終わるとも知れず、戦死者の数が日々報告されるにつれて、一般の人々の間に厭戦意識が高揚したジョンソン大統領政権末期の時期でした。ミラーはこの作品執筆の意図を、当時、泥沼化したベトナム戦争と大恐慌の類似を明らかにすることにあり、その根がすでに過去にあって、過去は繰り返されるという現実、その現実内に在る過去の存在に目をつぶる人間の愚が、長引く災難の根本原因だったと述べています。大恐慌でアメリカ人が学んだはずの因果律を背景に、ミラーはこの劇にベトナム戦争の愚かさを大恐慌が原因で破産した父親の処遇を巡るウォルターとヴィクター兄弟の無意味な確執に象徴化したのです。また、戦争を巡って国内が二分する様を見て、彼は大不況時代の人々が示した助け合いの精神の尊さをとくに、ヴィクターを通して訴えたかったに違いないのです。

最後に『アメリカの時計』ですが、この作品が発表された80年は、カーター大統領の任期3年目であった。ベトナム戦争やウォーターゲイト事件を経た人々は政治に幻滅し、77年に政府と国民の疎外関係を修復すべく政権の座に着いたカーター大統領に癒しの変化を求めたのでした。だが、スタグフレーションによる経済は悪化し、失業率も上昇、エネルギー危機にも見舞われ、彼の人権外交が裏目に出て「弱いアメリカ」、「暗いアメリカ」というネガティブな評価を定着させました。こういう時期にあってミラーが大恐慌を題材とした意図は、要するに、倦怠感を引きずりながらも次第に自己中心的なミーイズムが横行しつつあった70年代の人々に「人間の統一概念」や「個人的な心理面と社会や政治との結び付き」と「社会の崩壊という客観的事実」を訴えるためであった。これこそが、この作品を書いた理由なのです。

他方、良識のあるアメリカ人の間には、当然ながら自分自身とお互いが恩義を受けているコミュニティへの認識が強まった時期でもあります。ミラーはビッグズビーとのインタビューで、大恐慌時代には表面が崩れ去ってもその下にはしっかりとした「人間関係の骨格」(『現代

アメリカドラマ 1945-1990』、116ページ）があったのであり、これこそ自分が伝えたかったことなのだと語っています。この時代のミラーにとって書くべき主題は、またしても大不況時代を生き抜いた他者との共通の運命を分かち合う基本的なアメリカ精神の称揚であったのです。何よりも『アメリカの時計』には、市場経済よりも人間連帯の社会を希求する人々の声が反映されているのです。

6. 大恐慌と「アメリカの夢」の崩壊

ここで、大恐慌と「アメリカの夢」の関連性に関して、そのテーマを最初に扱った『幸運を独り占めにした男』について述べてみたいと思います。前述したように、1929年10月24日のニュー・ヨーク株価大暴落は、それ以後30年代始めまでのアメリカ社会に少なからぬ変化と混乱をもたらす大恐慌の引き金となりました。大恐慌は既存の価値体系の崩壊をもたらし当時の人々の価値観に大きな影響を及ぼしましたが、他方、伝統的なアメリカのエトスである「アメリカの夢」に基づく彼らの生き方や態度を見直すきっかけを与えることにもなった。その当時まで全アメリカ人を束ねていたと考えられていた「アメリカの夢」の倫理的・道徳的な側面の再考です。ところで、「アメリカの夢」には、二つの種類があります。一つ目は国家としての夢、あるいは社会的領域における夢であり、アメリカ人全体の国民的な理想に関わるものです。二つ目は個人的な領域における夢であり、アメリカ人個々の欲求に関わったいわゆる経済的成功の夢です。

個人が自らの幸福を求める権利を持つと謳った「独立宣言」の理念は、一般アメリカ人の「成功の夢」に明確な拠りどころを与え、その夢に拍車をかけました。南北戦争から金びか時代を経て急速に進んだ工業化と都市化の中で、物質万能、金銭崇拜の風潮が蔓延し金や富が正義や道徳を押しつけた時代の後、第一次大戦の戦争景気を経て1920年代に入ると富を求める人々の「成功の夢」は、否応なしに膨張し続けました。しかし、29年の大恐慌はその繁栄に冷水を浴びせ、それまでの楽観的な「アメリカの夢」は、こうして変貌を余儀なくされたのです。大恐慌は結局、共通の土壌の上に培われた重要な文化的・職業的なアメリカ的慣習、すなわち「アメリカの夢」に極めて大きな影響を及ぼしたのであり、少なからず当時の作家達もその影響を受け、この大不況に関する作品を残しています。無論、ミラーもその例外ではありません。

事実、ミラーの最初のブロードウェイ進出作品『幸運を独り占めにした男』は、この時代を背景とした「成功の夢」のテーマを扱ったものでした。そして、彼のその後の作品の幾つかも、アメリカの「成功の夢」にとって挑戦的でしかも危機的であったこの時代の様々な問題を取り上げています。『幸運を独り占めにした男』は、まさに大恐慌と「アメリカの夢」の複雑な関

係をリアリスティックに、10年にも及ぶ大不況によってもたらされた当時のアメリカ社会の無力感をよく反映した作品なのです。すなわち、この作品は、第一次大戦後の産業主義・資本主義が頂点を極めたものの大恐慌によって状況が一変し、それまでの精神性を重んじた伝統的な「アメリカの夢」が物質的・世俗的な価値観を重視することで変貌を余儀なくされた「成功の夢」という極めてリアリスティックなテーマを扱った劇と言えるのです。

7. アメリカ社会へのミラーの警告と警鐘

さて、最後に、これまでお話してきた大恐慌と「アメリカの夢」というミラーの二大テーマの背景とテーマ相互間の関連性をまとめ、そこに見られる彼のアメリカ社会に対する警告と警鐘を読み取ってみたいと思います。ミラーは1915年にニュー・ヨークのユダヤ人居住地区のハーレムで生まれ、恵まれた家庭に育ちましたが、14歳の時にニュー・ヨークの株価大暴落が発端となって世界的に広がった経済大恐慌の煽りを喰らって、父親の衣服工場が倒産しました。この体験がその後のミラーの人生観に甚大な影響を与え、彼の思索と創作活動の原点になったのです。既に述べましたが、この一家の苦々しい体験は、彼がミシガン大学在学中にホップウッド懸賞応募作品として書いた『悪人ではない』を始め、その後、書き直されて『彼らもまた立ち上がる』と『草なお茂り』となった、いわゆる『エイブ・サイモン家族劇三部作』に描き込まれ、『二つの月曜日の思い出』と『アメリカの時計』という自伝的な作品に継承されたのです。間接的には、『幸運を独り占めにした男』、『みんな我が子』、『セールスマンの死』、『転落の後に』、『代価』などの作品の背景となり、こうして大恐慌の体験は、直接・間接の違いはあるものの、彼の主要作品の一大テーマとなって発展したのです。

アメリカは、南北戦争後、フロンティアの消滅を経て西漸運動が終結した19世紀末から20世紀初頭にかけて、巨大な産業主義の台頭を見ました。これが伝統的な「アメリカの夢」に変化を及ぼし、大恐慌後から徐々に倫理性を欠いたビジネス上の成功を最高の価値とする「成功の夢」が出現しました。それを一気に加速させたのが、大恐慌です。金持ちが一瞬にして人生のどん底に突き落とされた当時の様子を実際に見せ付けられた若かりしミラーは、従来の「アメリカの夢」の崩壊を知り、目に見えない力に操られる人間の不条理を認識したのです。こうした状況で人々を鼓舞したのが、まさにビジネスでの「成功の夢」であり、そのテーマを扱った作品が、いわゆる「成功の夢三部作」とも称せられる『幸運を独り占めにした男』、『みんな我が子』と『セールスマンの死』だったのです。

とくに『幸運を独り占めにした男』は、「神々の影像」で述べた次のミラーの大恐慌を回想する言葉を裏書きするものです。「こうした環境によって、私は早くから無意識ながら、全過程そのものにすっかり興味を失うようになった。物事はどのように関係し合っているか、人の

生来の個性はまわりの世界によってどのように変えられるか。もっと難しい問題だが、人の方が、世界をどのように変えることができるのかといったことである。これは学問的なものではなかった。最初は文学的・演劇的な問題でもなかった。人生を歩み続けるためには何を信ずるべきかという実際の問題であった。たとえば、人は成功を賞賛すべきであるのか——当時さえ、成功している人々がいたのだから。あるいは、人は常に成功を幻想に過ぎないと看破すべきであるのか。・・・ 成功は不道德なものではなかったのか——近所のほかの人々みんなが、ビュイック自動車をもっていないばかりか、朝飯も取れないでいた時には。何を信ずべきか」（「神々の影像」, 178ページ）。

既に見たように、ミラーは「大恐慌は私の本であった」と述べています。大恐慌は、まさにミラーの思索の原体験であり、アメリカの「成功の夢」の崩壊、サバイバル、連帯など、一連のミラー的テーマは、この思索に基づいているのです。彼の一大傑作『セールスマンの死』は、平凡な人間の夢と挫折を描き、「アメリカの夢」が「アメリカの悲劇」に転じる物語で、そこにはミラーのアメリカ社会への苦い批判精神を見ることができます。ミラーの「アメリカの夢」と「成功の夢」に対する警鐘を考えることは、今日、重要な意味を持つと思います。

おわりに

本日の講義を終わるに当たって、今一度、1929年の大恐慌と昨今の金融危機との関連性を振り返って見ましょう。29年10月の株価大暴落の後、1万以上の銀行が倒産し、労働者の25%が失業した経済大不況という危機的状態にあって、フランクリン・D・ルーズベルト大統領は、その33年の就任演説で変革を次の様に訴えました。「まず私の信念を述べましょう。我々が恐れるものは唯一つ、恐れそのものです。言われなく理不尽で名状しがたい恐怖です。退却から前進への切り換えが、この恐怖のため進まないのです。我々が直面している困難は、物質的なものばかりです。朽ち果てた産業の亡骸があちこちに転がり、農家は作物が売れず、何千という世帯が貯蓄を失いました。失業者の大群が生きるすべを求めてさまよい、仕事がある者も賃金は少なく仕事はきつい。この暗い現実を否定する者は、おめでたい楽天主です。ふとどきな金貸したちの行いに世論の審判が下り、人の良心に背く者だと非難された。私たちの文明の神殿から金貸したちは逃げ去った。今こそ古来の真理に基づき、神殿を建て直そう。我が国は行動を必要としている。今こそ行動のときです。銀行業や信用貸付に厳しい監視が必要だ。他人の金を使った投機には終止符を打つべきです。通貨を過不足なく安全に供給するシステムが必要です。これが今後の攻撃目標です。詳細な作戦をただちに審議するよう新議会に要請します。早急な支援をすべての州に要請します」と。

このように75年前、ルーズベルトは資本主義システムが持つ危険性を訴え、当時の国民に根

本的な改革を求め圧倒的な支持を得ました。これが大統領就任後100日間で次々と新しい政策を打ち出して大改革を実行できた理由だと思います。この演説は金銭欲に目がくらみ物資主義にまみれて破綻した資本主義システムへ警鐘を鳴らした立派な道徳論です。ミラーも時代が悪い方向へ向かうたびに人々にこの大恐慌の教訓を思い出させ、世直しのために警鐘を鳴らしたのであり、明らかにルーズベルトとの共通性を見出すことができます。ミラーは2005年2月に惜しくもこの世を去りましたが、今生きていれば再び大恐慌を扱った作品やカネまみれの歪んだ「アメリカの夢」に邁進する人々を批判した作品を書いて、未曾有の危機から学ぶ姿勢を指し示し、その道義的責任を新しい観点から追及したかも知れません。

繰り返しますが、ミラーの教えは、アメリカが倫理的・道義的に危機に陥るたびに、大恐慌で露呈したアメリカ型資本主義の過ちとその結果として生じた、まさに悪夢と化した「アメリカの夢」の崩壊という負の遺産と同時に国の未来を信じてその危機を乗り切った人々の忍耐力を思い起こす必要があるということなのです。混迷の時代をサバイバルした大恐慌時のアメリカの人々の思いや行動を自分自身の問題に引き寄せて、あるがままに辿ってみる必要性と、当時とは別の種類の悩みを抱えたその時どきのアメリカ社会に、もう一度あの時代のこと、すなわち激動の時代に懸命に生きたアメリカの軌跡である大恐慌時代の多数の人々の夢や過ちや絶望や使命感を思い出してもらいたいとミラーはひたすら願ったと言えるのです。

今回の金融危機に話を戻しますと、それを克服するためには我々は大恐慌から多くを学べるのであり、学ぶべきなのです。今やアメリカは、そしてその他の国々もその倫理が問われているのです。さらに、現在の危機的状況は金融面のみならず、環境、食料、エネルギー、水、生命という分野からも警鐘を突きつけられています。資本主義経済が歴史的転換点にある今、世界はこの不況から脱出し正常な社会に復帰できるのか、歴史に残る名演説をしたルーズベルト大統領と同じ「チェンジ」という変革を掲げて当選した清新なイメージを持つオバマ次期大統領が今から1週間後、就任演説でどんな対策を謳い上げるのか、大いに注目したいところです。

(2009年1月13日、定年退職記念講義)